

# メルゲンとプジの物語

## —ナーナイの「英雄叙事詩」—

荻原眞子

### アムール・トゥングース諸族の「英雄叙事詩」

アムール・サハリン地域と沿海州地域の諸族に「英雄叙事詩」のあることは夙に知られている。ニヴィヒには「ガーストウンド」というジャンルがあり、これには孤高、無名の主人公が遍歴冒險を重ねる説話が含まれている。主人公は「一人の男」、「一人の女」、「一人の少年」であり、「われらがニグブン」（ニグブンは男、人の意で、ニヴィヒの自称である）として説話のなかでは繰り返される。この主人公が活躍する舞台もまた、特定されず、「大地の頭で」、「大地の足もとで」、「入江の真中の村」という表現にとどまる。この無名の主人公は全くの孤独であり、戦争やクマ送り儀礼に員数が必要な場合には木偶を作つて仲間とするほどである。そして、遍歴や冒險の動機は、殺された父や略奪された母、女の仇討ち、同胞を死滅させた疫病神への報復、さらには花嫁さがしである。孤独な英雄は遍歴の過程で超人的な力を發揮し、苦境にあってはシャ

マン的な能力に頼り、かつ敵に対しては殘忍である。ガーストウンドには長短さまざまな説話があるが、なかには主人公が二代目、三代目にまで及ぶものがあるという（Shternberg、荻原）。

さて、ニヴィヒに隣接するトゥングース系諸族には、主人公をメルゲン、マルゴ（ナーナイ）、メルゲン（ウリチ）、メッゲ（オロチ）、アンダ・メルゲン（ネギダル）とし、女主人公をプジン、プジ（ナーナイ）、プジ（ウリチ、オロチ、ネギダル）として語られる説話がある。その全容はさまざまな点でニヴィヒのガーストウンドと著しく異なる。何よりも、メルゲンとはブリヤトやモンゴルの伝承では「弓に秀でた者」、「弓の名手」を指すことは注目すべきである。メルゲンの英雄譚がニングマもしくはこれに類する名称のジャンルに含まれていることもアムール・トゥングース諸族に共通している。このジャンルは他に神話や動物昔話をも含むが、一方、英雄譚そのものも多様性に富む。例えば、ナーナイのニングマーには、メルゲンの遍歴譚、プジの遍歴譚、動物の遍歴譚、神話的な内容の説話がある（Aitroin 1986:15）。従つて、ナーナイの場合に

も、ニンギマーレは広い分類概念である。ニンギマーレの特徴は、先ず、その語りの様式にあり、各フレーズの冒頭にうたい出しが繰り返され、全体が吟詠されるものがある。英雄のニンギマーレでは、モノローグが詠われ、このモノローグの歌（ジャリ・ニンギマニ）は、英雄

事詩という文学一般の範疇に含めることができるかどうか。究極的にはこの課題が明らかにされなければならないと思う。

本稿では、ナーナイの「英雄叙事詩」の数篇を紹介する。

が悲劇的状況や緊迫した状況に陥った時に詠われる。これに対し

## テキスト

て、神話的内容のニンギマーレは、シャマンが大供養祭で語るものであるが、この場合には、最初から最後まで詠われる。（本来はこうして詠われたが、今日ではそれが忘れられて、全体が語りの形式をとるようになっていっている）（Avrorin 1986:16）。

このナーナイのニンギマーレには対応するのが、ウリチのニーンギマ、オロチのニマップ、ニマー、ニマイプー、ウデゲのニマシク、ネギダルのナ・マンクである。（因みに、エヴェンキではニムカソ、ニムガカンである。）

このように、「英雄叙事詩」が含められているジャンルは、トゥングース系諸族の場合にはかなり共通しているように見えるが、説話の構成や内容などについては民族によりさまざまな特徴があるようと思われる。ここで特に留意すべき肝要な問題は、仮に「英雄叙事詩」とした説話群が神話や動物昔話とは別の、独自のジャンルをなしていない点である。このことはアムール・サハリン地域の口承文芸の特質を全体として考える上でも極めて興味深い。英雄叙事詩と一般に称される古今東西の類例（これにもまた実にさまざまな差違があるが、）に比した時、アムール・トゥングース諸族のマルゴン、ブジの説話群がどのように位置づけられるのか、これを英雄叙

### 一、マルゴ 梗概

①主人公はマルゴ、孤独な狩人である。ある時、サグヂリムハに妻を拐かされた男が救助を求めるためにやって来る。マルゴと男は老婆に誘拐した敵の所在を教わり、見つける。マルゴはムハと鬪うが、鬪いは長く続き、マルゴは相手を倒すことができない。

②一羽のカモが飛んてきて、敵の急所は鉄の皮膚が薄くなつている額であり、そこへ唾を吐きつけば、相手は死ぬと教える。こうして、敵のムハを倒し、その妻と娘を引き連れ、救出した妻と男を奴隸にしてマルゴが帰ろうとする。

③再びカモが現れ、マルゴの父を殺し、母を奪つた敵アルフウリムウハンを討つことを教える。湖の岸を三日進み、小川を九日間遡ると、そこに目ざす敵があり、マルゴはこれと鬪う。又しても鬪いは長期にわたる。

④例のカモが鳥の一群と共に現れて、敵の靈魂の入つた卵をマルゴに渡す。マルゴが、この卵をムウハンに投げつけると、敵は倒れて死ぬ。マルゴは敵の妻や娘を引き連れて村へ凱旋する。

人里を遠く離れた所にマルゴという男が一人住んでいた。その住家は大そう大きく立派で、百余の倉には宝物が一ぱい入っていた。マルゴはいつも獵に出ては獲物をどつさり持ち帰った。

「今日は獵に行かないことにしよう。」ある日マルゴはそう考えて家に残り、そのままぐっすりと眠ってしまった。

ふと目がさめると誰だか家の方に近づいて来るものがある。その男は家に入って、うやうやしくマルゴに挨拶してから、自分の妻を誰かに盗まれたと訴えた。

「それでは一緒に出かけるとしよう。加勢してあげよう。」マルゴはそう言つた。  
二人はそこで夜を明かし、あくる日の朝早く、つれ立つて出かけた。長い間歩いて行つた。すると行く手に、一人の老婆が現れた。マルゴたちはその老婆をよびとめた。「もしもし婆さん、もしやわたくしの女房を盗んだ男を知りませんか。」妻を失つた男がたずねた。老婆の話では、大きな湖の向うに力の強い男が住んでいて、つい先ほど家に帰つたばかりだが、大せいの女を連れていたということだった。マルゴと妻を失つた夫とは、それこそ妻を盗んだ男に違いないと思つた。

彼らは老婆に教えられた道を進んで行つた。三日経つと、なるほど大きな湖の畔に出た。その湖の岸には大きな家が立つていて、そこに強者のサグヂリムハが住んでいた。彼らが家に近づくと見るや、ムハは表に飛び出してきた。妻を失つた夫はムハの威勢にすつ

かり恐れをなして、マルゴの後に隠れた。さらばとマルゴは、ギダ（長い柄のついた鉤）をとつて、サグヂリムハに立ち向つた。  
長い間二人は闘つた。サグヂリムハの方はギダが折れても剣が折れても、すぐに娘が新しいのと取換えてくれるが、マルゴの方には誰も助けるものがない。ギダも剣もとうの昔に欠けてしまつた。マルゴは困つた。

「このおれを少しでも助けてくれるものはないだろうか。」マルゴがそう考えていると、どこからともなく一羽のカモが飛んで来て、人間の声でささやいた。「おまえさんのその武器では、サグヂリムハはとても殺せない。だが彼の額には、小さなアザがあるはずだ。そことのところだけが鉄の皮膚の薄くなっているところだ。よろしくか、睡を口にためて、その額にぶつかけてやりなさい。そのアザに当りさえすれば、サグヂリムハは死んでしまうでしょう。」

マルゴはカモに言われた通りにした。サグヂリムハの額の真中に力一ぱい睡をはきかけた。ムハはふらふらと倒れて死んだ。

マルゴはサグヂリムハの娘と妻とを全部、それに二人で探した女房を生捕り、その夫はニヤカ（奴隸）にした。マルゴは家に帰ろうとした。するとまた例のカモが飛んで来て、人間の声でささやいた。

「帰りを急いではいけない。お前さんは強いアルフウリムウハンを探し出さねばならない。お前さんがまだ小さかった頃、その男はお前さんの父上を殺し、母上をとりこにした。」「それでは、どのようにしてアルフウリムウハンを探せばよいのか。」とマルゴはカ

モにたずねた。

「この湖の岸に沿って三日の間進みなさい。四日目に小川が見えるでしょ。その小川に沿って上って行くと一軒の家がある。その最初の家こそ、めざすアルフウリムウハンの家です。」

マルゴはみんなの者を小舟に乗せて、カモに教えられた方角に向った。なるほど四日目にその小川にたどりついた。この小川に沿って九日行くと、ようやく大きな家が見えた。アルフウリムウハンはいちばん早く彼らを見つけて、家を飛び出しまだ声でどなつた。

「お前は一体何をしに来た。可哀そうにマルゴよ、お前はゴリド、のうちでこのオレ様より強いものがないということを知らないと見える。オレはお前をやつつけて、肉はブツセウに食わせてやる。」

マルゴは岸にとび上り、アルフウリムウハンに立ち向つた。

闘いがはじまつた。闘いは長く続いたが、一向に勝負がつかない。すると、突然、先日のカモが飛んで来た。その後には、たくさんの鳥の群を従えている。カモはマルゴに向って大声で叫んだ。

「マルゴ、いまこの卵を放りますから、早く掴みなさい。落としてはいけない。鳥をうんと驚かしなさい。この卵は普通の卵ではない。このなかにはエルゲニ（靈魂）が入っている。」

マルゴは卵をつかみ、しっかりと両手で握りしめた。するとアルフウリムウハンが、おいおいと泣きはじめた。

「その卵をわたしに下さい。その代り、わたしの娘も女房も、みんなあなたに差し上げよう。」「いや、これはお前には渡せない。お前はわたしの父上を殺し、母上を苛めた。どうするか見ていてるがよ

い。」

マルゴは手を振り上げて、ムウハンの額めがけて卵を投げつけた。卵は微塵に碎け、アルフウリムウハンはばつたり倒れて死んだ。

マルゴはアルフウリムウハンの娘や妻をみんな生捕りにした。母上も探し出した。それからみんなのものを連れて、家路をさして帰つた。

家に帰つてから、メルゲは幸福に、安樂に暮した。（＊ゴリドはナーナイの旧称）（ロペーチン 1943:75-78）

## 二、二人の兄弟マルゴ

### 梗概

①主人公は二人兄弟のマルゴである。彼らは両親を知らず、狩りをして暮している。ある時、兄がトラに引裂かれて死ぬ。弟がそれを見つけて悲しんでいると、「一羽のトビが現れて、女の声で『女シャマンを訪ねて、兄を生き返らせてもらうように』と教える。弟のマルゴはその女シャマンを訪ねて、兄を蘇らせてもらう。」

②その後、女シャマンは、兄弟たちが幼少の時、父親は強力な悪いシャマンに殺され、母は連れ去られたこと、姉は生きているがトビになつていてることを告げ、父の仇討ちをすべきだと話す。

③そして、二人のマルゴをシャマンにする。  
④二人は長い間歩いて、一軒の大きな家に着く。その三人の男

たちが父殺しの敵であることを覺り、鬪いをはじめる。十日十夜闘う。

⑤トビが現れ、人間の声で「敵の男のエルゲニ（靈魂）の入った卵を持って来る」と告げる。

⑥しばらくたってから、トビはシラカバの小箱をもつて来る。中に黒と白の卵が一つずつ入っている。

⑦敵の男は卵を渡すよう哀願するが、メルゴはそれを相手の頭に投げつける。敵は倒れて死ぬ。こうして、三人の強者を殺す。

⑧その家でカモを料理して食事を済ませ寝る。夜半に三人の女が入って来て、食べたり煙草を喫つたりする。そのうちの一人が、「父殺しの下手人は今日討つた男の叔父で、アムール川の上流に住んでいる。その男はシャマンを百人、強者を百人集めて待つていふ」と告げる。そして、加勢することを約して消える。

⑨その後、鈴の音が聞こえ、カワウソがしおび込む。襲いかかったカワウソにメルゴは夜具の中から弓を放つ。カワウソは逃げていくが、それは殺した三人の強者の叔母であった。

⑩翌日、兄弟は南北に別れて進む。弟のメルゴは山で、穴から出てきた大男と鬭い、この相手を河に投げ込む。河から水柱とともに老婆が現れ、大男を馳走してくれたことに礼を言つて、メルゴに加勢を約束する。

⑪先へ進むと、山をすり下りてくる老婆に出会う。老婆の言いなりに山を上つたり、滑り下りたりしているうちに縄で縛られ、危うく斧で殺されそうになる。この老婆とその家へ行く。眠っている

間にこの家は出口のない岩屋となつている。

⑫姉のトビが現れ、「魔女が岩に家の形を描くと、それが本物の家になり、その家は次第に石になる」と告げ、体当りするが岩屋は壊れない。トビはシャマンを呼びに行き、そのシャマンによつてメルゴは岩屋から救出される。

⑬「シャマンになるために川上へ行き、そこの渕にとび込んで、そこの女シャマンの許へ行つて三回お辞儀をするように」とトビに教えられる。

⑭女シャマンは九人の弟子を呼び、大きな湯沸しに湯を用意させ、メルゴの手足を切り離し、身体をバラバラに刻んで湯沸しの中に投げ込む。九人の弟子がふいごであおぐ。湯がたぎり、女シャマンが大きく「カア」と叫ぶと、メルゴが強者となつて出て来る。シャマンは護符を与えるながら、「この先で出会う女から差出される煙草や食物には口をつけてはならない」と云う。

⑮メルゴが女シャマンに教えられた方角に長いこと歩いて行くと、一軒の家がある。その女が煙草を勧めるが、メルゴがそれを折つて床に投げつけると、それは蛇になつて家から出て行つた。食卓や食物を壊して床にたきつけると、それらは亀やトカゲになつて床から這い出した。その夜はそこに泊る。

⑯夜半にその家の女と老人が入つて来る。老人がメルゴに斧をもつて襲いかかつたが、メルゴはそれをかわして、老人を地面に投げつけた。起き上つた時、老人は若者に生れ代つていた。メルゴはこの若者と長い間鬭う。

(17)姉のトビが飛来して、「エルゲニが見つからないのでわたしたちの像の入っている丸太（すなわち、家の守護靈の柱）に力一ぱいぶつけて見るよう」と言う。その通りにすると、老人は倒れて碎ける。丸太の下からいつかの水の人喰い婆が現れて、メルゴに「人間の馳走」の礼を言い、加護を約束する。

(18)先に進んで行くと父殺しの兄弟たちの家の中でシャマンがメルゴの所在を明かそうとして儀式をやっている。メルゴが間もなく現れると予言される。

(19)メルゴは自分の額を指で弾いて老人に変身する。家に入つて馳走になるが、老婆が見破る。家の主との戦いがはじまる。メルゴは相手を殺す。

(20)先へ進み、父殺しの家に着く。家の近くの岸で老婆が魚の料理をしている。メルゴはそれが母だと思う。家の中に百人のシャマンと百人の強者がいる。メルゴが家の主人と鬭いをはじめると、百人のシャマンと百人の強者が立ち向つてくる。メルゴはトビ、クマ、トラに変身して敵をやつづける。

(21)姉のトビが飛んで来て、海魚の胃袋のなかから見つけたという敵の主人のエルゲニをメルゴに与える。その卵を相手に投げつけると、敵は倒れて死ぬ。

(22)母が「父の死骸は、海底の石の下にある」と教える。メルゴはシャマンの儀式をはじめ、父の死骸を引き上げて、それを蘇らせる。

(23)メルゴは敵の財産とその妻たちを集めて帰途につき、途中で、来る時に寄った家で財産と女を集め、引き連れて帰る。こうしてメ

ルゴは自分の家に帰り、幸福に暮した。(Lopatin 1933:215-221,ロバーチン 1943:79-93)

### 三、二人のフジ

#### 梗概

(1)昔、二人の姉妹のフジが住んでいた。一人は鳥や獸を狩りして暮していた。ある時、姉のフジが「わたしたちには夫がない。鳥や獸はみな、虫でさえも番つているというのに」と言う。妹は「今まで何も困ることはない」と言う。

(2)夜半に、姉のフジは炉の上で大きな鉄釜に湯を沸かし、身体を洗う。いやがる妹も洗つて、髪を梳く。二人は美しい服を着て出かける。

(3)二人は道が二叉になつてゐる所まで来る。姉のフジは「わたしは馬や車の通る大きな道を行くから、おまえは狭い道を行くよう」と言う。妹のフジはいやがるが、無理矢理にそさせられる。

(4)妹のフジは泣きながら狭い道をどこまでも歩く。ある川岸で一軒の家にたどり着き、内のブルハンに大声で水を乞う。すると水の満ちた七つのシラカバの杯が運ばれて来る。フジはそれを全部飲み干して、先へ進む。

(5)夜遅く別の家に着く。その庭には人骨が積上げられているが、フジは獸の骨だと思う。家中に入ると、そこにも人骨が沢山あり、七人の禿頭の兄弟が坐つている。フジを見ると、「新鮮な肉にありつける」と言つて、人喰いたちはフジにとびかかる。

⑥フジは針に変身して炉の灰の中に隠れる。禿頭たちは石の糸巻き（パンガファン）を使ってまじないをはじめる。「彼女はどこへ行つたか、家の中にはいるのか、チエネ、チエネ、トウンクイ、どの変身術ですり通けたのか。」「彼女は針に変身して、灰の中によび込んだ。チエネ、チエネ、トウンクイ」と石の糸巻きから聞こえてくる。

⑦禿頭たちは灰の中を捜して、針を見つける。フジは再び人間の姿になる。禿頭たちが襲いかかったので、フジは毛虫になつて木の柱の中にもぐり込む。

⑧七人の禿頭たちは、又しても石の糸巻きを使って、まじないをし、毛虫を見つけ出す。フジが元の姿になると、再び禿頭たちが襲いかかつたので、今度は一滴の血となつて壁にとび上る。

⑨禿頭たちは再び、石の糸巻きで占つて、フジの所在を突きとめる。そこで、フジはアブに姿を変えて飛び去る。後から七匹のアブが追いかけて来る。

⑩フジはスカシク（？）に変身して逃げる。後を振りかえると、七匹のスカシク（？）が追つて来る。

⑪そこでフジは百匹の昆虫の群となる。その虫たちは四方八方に飛び散つてから、また一かたまりになる。禿頭たちはフジを認めて追つて来る。

⑫このようにして禿頭たちはフジをどこまでも追つた。夕方に一軒の家にやつて来る。禿頭たちはその家の魚の乾燥棚の横木にぶつかって動けなくなる。フジは、そこに麗しい女性のものと思われる

服や耳輪、鼻輪を見つける。家中に入ると、そこには寝台用の板床とわざかな男性用の持ちもの他には何もない。フジはそこで煙草を喫い、炉の奥の皿から肉と臓脂をとつて食べる。

⑬突然、山の森から割れるような大声がして、家の主が戻つてくる。フジを見ると、「わたしは、アンダマルガだ（アンダとは仲間の“と”いうほどの意）。悪魔ではない。今夜はここに泊りなさい」と言う。フジが肉の料理をして差し出すと、マルガは「フジよおまえはどこへ行くつもりか」と問う。フジが「七人の禿頭に追われて、ここへ来た」と答える。マルガは、「わたしは彼らを知つていい。わたしは彼らに長い間、恨みをもつてゐる。ここにいれば、悪魔たちはおまえに害を与へはしまい」と言う。フジはそこに暮らす。

⑭ある日、マルガは狩りに行かずに家にいる。「悪魔たちが今日やつて来る」と言う。最近くに彼らは「チヨコル、チヨコル、チヨコル……」というような音を立てながらやつて来て、「自分たちの獣がこちらへ來た」と言う。

⑮マルガはフジを火口にして、火打石用の袋の中に入れられた。悪魔たちはしばらく待つてから、石の糸巻きで占いをはじめる。そして獣がこちらへ來た」と言ふ。

⑯マルガは火打石の袋を指の間にはさんで火口と燧石とを地面に投げつけて、「さあ、フジを地面から拾い上げろ」と言う。禿頭たちはしばらく待つてから、石の糸巻きで占うと、「ここに長居は無用、さもなくばひどい目に遭うぞ」と答えるがある。七人の禿頭の一番下の弟が逃げる。マ

ルガは「ますいことになるな。奴が来て、わたしを殺すだろう」と言う。マルガは再び狩りに出かける。

(17)ある日、マルガは狩りに行かず、フジに「別の場所に移ろう」と言つて、彼女に魚皮を加工する鉄の棒を与える。二人は森へ向つて歩き出す。

(18)一軒の家にやつて来る。そこには六人のフジがいる。マルガが

フジを預けると彼女たちは、「これでわたしたちは七人になつた」と言う。マルガは「七人の禿頭と聞つて来るが、昼も夜も戸を開けてはならない」と告げて、出かける。

(19)七人のフジは薪や水の貯えを用意して戸に錠をかける。川の方から聞いの音が聞こえてくる。

(20)闇いの休止の時、禿頭の一番下の弟が家へやつて来て、力まかせに戸を開けて、フジに言う。「わたしの頭のシラミを取つてくれ。」フジは断るが、繰り返しの要求にシラミを取りはじめめる。禿頭が板床の縁に頭をのせた時、フジは鉄棒で頭を打つたので、禿頭は逃げる。フジは三晩そこで過ごす。

(21)マルガが戻る。「七人の禿頭をやつつけた。わたしは悪魔だ。遠い所へ行く。生きていれば戻つて来る」と言う。

(22)七人のフジはマルガの家に移る。そこへ七人のマルガがやつて来て、六人が六人のフジを妻として連れて行く。七人目のマルガが

フジに結婚を申込むが、フジが拒んだので彼は去る。  
(23)丸一年フジは一人で暮す。マルガが戻つて来る。フジとマルガは夫婦となり二年が過ぎる。

(24)ある時、フジは自分の姉を訪ねる。姉には夫があった。しばらく後に、姉妹のフジは夫と一緒に暮すようになり、夫たちが狩りに行つて鳥や獸を殺して来た。(Laufer 1900:331-338)

#### 四、アルホー

##### 梗概

①アムール川の岸、深い森の中に一軒の家がある。内部はずつかり整っているが、人の住んでいる気配はない。そこに振りかごがあつた。

②ある時、二人の狩人がやつて来て、その振りかごの被いをとろうとするが、この世のものは思えないかん高い叫び声がしたので、狩人たちは驚いて逃げ出す。

③翌日、一人の勇者マルゴがやつて来て、そこで夜を過ごそうとして正に寝ようとした時、振りかごの中から血の凍るような叫び声が上つた。マルゴは驚きもせず、振りかごのところへ行つて、その被いをとつた。中には男の赤ん坊がいた。マルゴが腕に抱き上げると、赤ん坊は激しく彼を引っかいた。マルゴは「これはただの赤ん坊ではなく、シャマンだ」と言う。翌朝、マルゴは出発前に、赤ん坊に食物を与える。「大きくなつたら、大きな崖の上にあるわたしたの家に来なさい」と言う。

④子供は泣いて、独りごとを言う。「一体、どれほど長い間、赤子でいたらよいのか。大きくなつて、歩いて川で泳ぎたい。」そこで、渾身の力で伸びをすると、振りかごは真二つに割れる。赤ん坊

は両足で立ち、歩くことができる。

⑤彼は勇者マルゴの家へ向かう。小屋へ行くと、マルゴの妻は、「おまえの面倒を見るには並の女では足りない。わたしの母の許へ行きなさい。彼女は巨人女で、寝るには三つの寝床が必要だし、その乳房の一つには普通の女の百人分の乳が入っている」と言う。

⑥赤子は巨人女の家に行く。「長い間、わたしはおまえを待つていた。三十年おまえはあの振りかごの中にいた」と巨人女、マイザ・ママは言う。彼女が乳房を与えると、赤子はそれを両手でつかんで飲み干し、もう一方も空にする。すぐさま背が伸びて、服が破けた。「おまえの名はアルホー、おまえの力と足の速さに並ぶ者はいない。」

⑦アルホーは蚊に変身して、マルゴの家の家に戻った。そこに数日いた。ある日、マルゴの妻が「夫のマルゴが巨人モーハンの網にかかるって、火の上に吊るされている」と言って、悲嘆している。

⑧「わたしが救い出そう」とアルホーが言うと、マルゴの妻は鉄の鳥を作る。アルホーは、その中に入り、両腕を翼の中に突込む。

「木の頂に止まつてはいけない。切り株か根元だけに止まるようにな」とマルゴの妻は注意する。

⑨アルホーは雲の中を飛んだ。夜に、木の下に横たわって眠ろうとするとき、木の頂でモーハンの網にかかった二羽のカモがうめき声を上げている。アルホーが助けると、カモは人間の声で礼を言う。カモは二人の女シャマンの変身である。

⑩翌日の夜、アルホーは高い木の頂に寝床をつくり、案の定、網

にかかる。モーハンがやって来て、アルホーを喰らおうと、大きな石斧で打ちかかる。アルホーはそれをかわし、破れた網から逃げ出す。そして、モーハンの背にとび乗り、鉄のくちばしの一撃で巨人の頭に穴を開け、殺す。

⑪アルホーは飛んで下に下り、ウサギを捕らえ、火で炙って食べる。突然、焚火の炎の中から家の守護霊のジュリーが現れ、「親切な女の忠告を聞かなかつたのか、危うく自分の命を失くすばかりか、沢山の時間を無駄にした」と言って、鉄の鳥に入り、姿を消す。アルホーは、困惑するが、それから、水に潜つて、忽ちサケに姿を変える。

⑫アルホーはサケとなつて、水に覆われたアムール川の下を遠くまで泳いで行つた。氷穴を見つけると、そこから外に出て、再び若い首領となつた。その岸の上にはモーハンの村があつた。鉄の網に祖父のマルゴが吊る去れ、辛うじて生きていた。アルホーは憤慨して村民の大部分を殺し、命を助けた数人には年老いたマルゴに仕えるよう命じる。

⑬アルホーはアブに変身して飛んで行った。一本の裸の大木のところへ来ると、その下には人間の骨と髪の毛が山積みになつてゐる。程なく夥しい数の鳥が木に止まり、話しはじめた。その話から、アルホーは邪悪なデルゲリが間もなく若い娘を引きずつて、そこへ来ることを知る。その娘はケル・アルダの妹で、デルゲリに拐われて来たのだ。

⑭夜中にデルゲリが娘を引きずつてやつて来て、枝に止まるが、

どの枝も次々に折れる。「わしと同じほど強いのがたつた一人いる

が、奴は三十年も振りかごの中にいる赤ん坊で、まだ大きくなつて  
いない」と人喰いは不審がる。そこへ、アルホーが飛び出す。人喰  
いがかかるて来るが、アルホーがその目に鉄棒を突き刺して、目を  
えぐり出したので、人喰いは地上に落ち、その場から逃げ去る。

(15) アルホーは娘の腕の傷に唾をつけて、傷を癒やす。それから、  
アルホーは枝を一本折って、そこに娘を乗せ、「これで家に帰りな  
さい。止まりたい時には、指で三回枝を打ちなさい」と言う。娘は  
飛び去る。

(16) アルホーはアブになつて反対側に飛んで行つた。ごつごつした  
崖のところに一つの家があり、中風の老婆がいる。夜、火が消える  
とすぐに、アルホーは老婆の寝床へ行って寝た。朝目がさめると、  
傍には美しい若い女がいた。女はサハリという大シャマンだった。

(17) 十日目にアルホーが旅立とうとすると、妻はデルゲリのことで  
警告し、「彼には三人娘の強力なシャマンがいる。わたしはちょく  
ちょく行って、助ける」と言う。

(18) アルホーはアブになつて飛び、二十一日目に大きな家に気づ  
く。中から若い女が三人出て来て、彼を招じ入れる。応じようとする  
と、背後に妻のサハリがいて、「食べても良いが、酒は飲んでは  
いけない」とささやいて姿を消す。

(19) しつこく勧められる酒を二人の女に投げかけると、忽ち炎と  
なつて家全体に燃え広がつた。アルホーは再びアブとなつて壁の穴

から飛び出す。

(20) 墓地の上へ来ると、墓の中で「出して下さい、わたしは死んで  
はいない」と言う声がする。墓を暴くと、若い女が起ち上る。女は  
自分の家にアルホーを招く。妻のサハリがやつて来て、それがデル  
ゲリの三人目の娘で、「腫れている片手を打てば、女は死ぬ」と告  
げる。

(21) アルホーが女の包帯を巻き直そうと申出で、その手を打つが、  
その突端に氣を失う。正気に返つた時、アルホーは大きな湖の岸辺  
にいた。そこへ妻のサハリがやつて来て、アルホーが女の包帯した  
手を打つた時、「女はもう一方の手で一発くらわしたので、二つの  
湖の向うに投げ飛ばされた」のだと事の顛末を説明する。

(22) サハリがアルホーの後頭部を打つと、彼はもう一度、宙を飛ん  
で墓のところに落ちる。再び、同じ女に会う。女は自分の家に招  
く。妻のサハリが現れて、「これはデルゲリのあの娘だ。箸を使つ  
てはいけない。折りなさい」と忠告する。

(23) アルホーは女のところに戻る。女はさまざまなお味を供した。  
アルホーは酒を飲んだが箸は使わずにいた。ナイフで箸を打つと、  
二匹の蛇が真二つに切れていた。女が畜生を上げて火のついた燃え  
さしを投げつけるが、アルホーは脇に跳びのいて女をつかまえよう  
とする。

(24) その時、父親のデルゲリが現れ、二人の巨人の間に壮絶な闘い  
が起つた。デルゲリの頭から炎が噴射された。長い闘いの末、ア  
ルホーが敵の頭から出る火に唾を吹きつけると、相手は倒れて死ん

だ。アルホーは剣でその両眼をえぐり、腹を突き刺す。そして、その娘も捕らえて殺す。

(25) アルホーは再びアブに変じて飛び続ける。二人の巨人が闘つているのが目に入る。彼らはもう何年も闘い続けている。アルホーは自分も巨人となつて二人の間に割つて入る。身長が二一〇フィートの巨人を倒す。身長が四九フィートのもう一方の巨人ナンダダは助けてもらつたお礼に自分の娘を嫁にと申出する。アルホーはその娘と結婚し、九日間そこに留つてから、また、旅を続ける。

(26) 飛び続けて、ある家にやつて来る。そこにはアルホーが人喰いのデルゲリから救出した娘がいる。その兄は強力な巨人キチャルダであるが、彼は妹をアルホーの嫁として与え、三人はしばらく共に暮す。

(27) アルホーと兄の二人の巨人はアムール川を舟で下る。大きなイルゲン村に近づくと、アルホーの妻サハリがカモの姿で飛来し、「ここには三人の年とった巨人ロント、セルゴ、ネルホがいる。三十年前にもこの三人があなたの父親を殺した。今こそ仇討つ時だ」と話す。

(28) アルホーとキチャルダが村に入ると、三人の巨人は奴隸を遣した。アルホーがその奴隸の腕や脚を折り、首を打つと、それが胴体から離れて、三人の巨人の許へ転がつて行き、事の次第を告げる。そこでロントがキチャルダと闘いをはじめ、七日間の闘いの末にキチャルダは敵をやつつける。次にセルゴが現れ、キチャルダと七ヶ月闘い、殺される。最後にネルホが出て来て、キチャルダと三年間

闘うが、遂にキチャルダが殺される。そこでアルホーがネルホに跳びかかり、この闘いは何年も続く。

(29) 妻のサフリがカモの姿で飛来し、アルホーの妻たちと敵のエルゲニを捜し出すと伝える。

(30) アルホーと巨人とは七年間闘い続け、両雄の血は傷口から流れ出し、辛うじて立つていられる有様である。遂にカモが戻つて来て、敵のエルゲニの入つた袋をアルホーに渡す。アルホーがそのエルゲニの腕を引き抜くと、すぐさまネルホの両腕が落ち、頭を引き抜くと、巨人の頭が胴体から転げ落ちる。巨人は死ぬ。

(31) アルホーは死んだキチャルダのところへ行き、その遺体を宙に投げ上げる。それが落ちた所でキチャルダは蘇る。

(32) 二人の巨人はネルホの家に入り、その娘である二人の巨人女とそれぞれ結婚する。次に、村を分かち合い、そこに九日間暮してから、妻とすべての村人を連れてさらに川を下る。

(33) 強力な巨人セレコの村に着いた時、セレコが出て来て雷のような声で怒鳴る。その大声に感嘆したアルホーが片手を動かすと、セレコは宙を飛ばされて、舟の舳先に張り着く。二人の英雄はセレコの妻とその村人を引き連れて旅を続ける。

(34) 三日目、遠くに巨人メルゲンの村が見える。まだ遠いのに、メルゲンは一行を認めて「力比べをせよ」と怒鳴る。アルホーはその遠視眼に感嘆し、片手を動かして、そのメルゲンを舟の帆柱の天辺に坐らせる。メルゲンの妻たちと村人を全員連れて旅を続ける。

(35) ある時、二人の英雄と一緒にアムール川の真中の島で一夜を過

じそとうとする。夜半にアルホーの妻の一人が夢見に驚き大声を発して、これから起る水難のことを予言する。

(36)翌日、川下から吹きつける強風のために舟は波にもまれ、岸壁にぶつけられて木端微塵になり、全員が溺死する。アルホーだけが岸に打ち上げられて、意識を失っている。

(37)アルホーが意識をとり戻した時、「どうして、おまえはわたしのことを忘れたのか。赤ん坊の時に乳をのませたのに」という声が聞こえる。アルホーは魚に変身して、その声のする川底へ潜る。そこには大きな家があり、モードゥルハンが娘のモーケと棲んでいる。老人は「どうして、わしのことを忘れてしまったのか」と責める。アルホーは「子供の時分のことを思い出せなかつた」と詫びる。モードゥルハンはアルホーを許し、娘を嫁として与え、仲間たちは全員無事であると告げる。アルホーがあたりを見ると崖は消えており、キチャルダと妻たちと村人たちが川を下って来る。その中に娘のモーケもいる。

(38)今や、アルホーは自分が三十年間赤ん坊だった家を指して行く。家は朽ちて崩れそうである。アルホーが片手を動かすと、そこに新しい大きな家が現れる。その家の周囲を走り廻ると、アルホーの両足が触れた所には家がつくられ、こうして大きな村が現れる。ここにアルホーとキチャルダは妻たちや村人たちと暮らす。

(39)彼らは仕合せに長い間暮すが、ある時、アルホーが病に倒れる。病気は悪化し、シャマンの日夜の祈祷も効かない。ある時、精霊ジュリーが現れ、アルホーは氣を失う。蘇生した時、彼は誰かに

油で清められているのを感じ、すぐに良くなる。

(40)アルホーは高い山に上り、そこから自分が滅した敵を守護しているすべての精靈を眺める。背後を見ると乳をくれたマイザ・ママの家があり、アルホーは悦んで、そこへ行く。彼女は、「今やおまえは大シャマンだ。朝に人が死ねばタベに生き返らせ、タベに人が死ねば朝には蘇らせることができる」と告げ、太鼓と帽子を贈る。アルホーはシャマンの歌を歌いながら山の峰々を越えて、家に詰る。人々は「どこに行つていたのか。突然ジュリーが現れ、あなた二人は消え失せた」と言う。アルホーはあつたことを事細かに語り、その後回復して、幸福に暮した。

(41)ある時、一人の男がアルホーを訪ねて来て、礼を尽くし、ジャブジヤル・メルゲンを生き返らせて欲しいと懇願する。アルホーは承諾し、アブに変身して、死んだ男の家に入る。太鼓を温めさせ、そこにいる全員に踊るようにと告げ、それから、太鼓をとつて九つの歌を歌い、家の周囲を九回踊つて廻る。ジャブジヤル・メルゲンは復活する。感謝の印に、自分の娘を嫁として与える。アルホーは一人で家に帰る。ジャブジヤルは娘を連れて来る。こうして、彼らはみな幸せに不自由なく暮した。(Lopatin 1933: 202-210)

## 「英雄叙事詩」の構成

アムール・トゥングース諸族のうちで、もつとも豊富な叙事詩をもつてゐるのは、このナーナイであるらしく思われる。他の諸族に

ついては採録されてはいても公けにされたものが少なく、全貌を捉えることは難しい。

さて、ナーナイの「英雄叙事詩」として、右に挙げた四話は、それぞれ主人公が異なっている。そのいずれもが典型的な説話を示している。第一話では、主人公は一人の男の英雄、冒険は別の男の盗まれた妻を奪回すること、次には父殺しの仇討ちをすることにある。孤独な英雄マルゴを助けるのは人の言葉を話すカモ、すなわち女性の変身である。このカモはマルゴが闘う相手の急所を教えたり、靈魂の入った卵を見つけ出してくる。急所には唾を吹きつけ、卵は相手にぶつけることによってどのような手強い敵も倒れて死ぬ。英雄は最後には征服した敵の妻や娘、財産、村人を引き連れて自分の村へ帰る。

第二話の主人公は兄弟であるが、説話の中での主人公は実質的には弟であり、これがすなわちマルゴである。マルゴを助けるのは兄弟の姉のトビである。彼女は女シャマンとかかわりがあるらしく、マルゴを女シャマンに引き合わせる。兄弟とトビの遍歴は父殺しの仇討ちを目的とする。途中で生ずる鬭いや敵との遭遇にはマルゴたちが殺した敵側から際限のない仇討ちもある。ここでもトビは敵を減す手段（シラカバの箱に入った黑白の二つの卵、海魚の胃袋の中にあった卵、相手を家の守護靈の柱にぶつけること）を教えて、マルゴに勝利をもたらす。シャマンのイニシエーションのモチーフ、父の遺骸を川底から引き上げて蘇生させる死者復活のモチーフはナーナイの「英雄叙事詩」にしばしば見られる特徴である。帰途

でマルゴは敵の財産と妻たちに加えて、行く途中で滅した敵の財産と女たちを集めて帰村する。

第三話では二人の姉妹が主人公であるが、ここでも実質的には妹が女英雄フジとして語られ、兄弟マルゴの場合と同様、年長者は話の後景に押しやられる。この説話でのもつとも大きな特徴は変身といわゆる変身逃走のモチーフである。フジは七人の禿頭の人喰いたちの家で、針、毛虫、血痕に姿を変えて身を守ろうとするが、人喰いたちは石の糸巻き（パンガファン）を使ってその度にフジを発見する。フジは遂にアブとなつて家から外に出るが、人喰いたちも同じようアブに変じて追跡する。フジがスカンク（？）百匹の昆虫の群に変身して逃げ続けると、人喰いたちも同じ姿になつて追う。辿り着いた家は味方のマルガの家であるが、そこではフジは火口に変えられ、火打石用の袋に入れられる。そもそも、姉妹たちが遍歴に出発した動機は夫を見つけることにあつたが、説話の後段では、当のフジを加えて七人フジの家に七人のマルガがやつて来て、互いに結婚をする。付け加えるなら、フジがしばしば女戦士であることも興味深い。

第四話では主人公は異常な赤子であり、異常な生長振りを見せるという点で、大変特異である。三十年間振りかごの中にいて、そこから出た時には巨人女の乳によつて急生長する。ブリヤトのゲセル・ボクドウを想起させるこの英雄はアルホーと名づけられ、彼は変身はもちろん、さまざま超人的な能力によつて、邪悪な人喰い巨人を滅し、父を殺した敵を討つ。アルホーを助けるのは妻の女シヤ

マンで、彼女はカモの姿をとり、アルホーが敵中にある時には必要な情報や忠告を与えて、夫の危急を救う。遍歴冒險の途中で主人公はアルホーと義兄の二人になる。一人が活躍するのは一貫して巨人の世界である。敵の靈魂は卵ではなく人形であり、アルホーはその手足や頭をもぎ取ることによって相手を殺す。さらに、遍歴から戻ったアルホーは巫病にかかり、シャマンとして生れ変わってからは、死者の復活を術とするようになる。

わずか四例から、ナーナイの「英雄叙事詩」の特質を論ずることにはできないが、アムール・トゥングース諸族の口承芸芸のなかでこの類の説話が固有のジャンルを構成していることは明らかである。この説話の歴史的・文化的意義については、やるに資料を涉獵しながら考察しなければならない。

SHTERNBERG L. IA.

MATERIALY PO IZUCHENIU GILIATSKAGO LAZYKA I FOL'KLORU,  
1908 ST.PETERSBURG

ロバーチン・イヴァン（大橋國太郎訳）

「コリド民話」『書香』一九四三年

大林太良

「アイヌのユーカラとその歴史的背景—日本とシベリア」『北方の民族と文化』山川出版社 一九九一年

斎藤君子

「シンガース系民族の語り」『口承芸芸研究』第十一号、一九八八年

風間伸次郎

「ナーナイ語ナキスト」『シンガース言語文化論集 四』（黒田信一郎、津田敏郎編）、一九九三年、小樽商科大学言語センターア

萩原眞子

「ニヴヒ族の英雄説話」『民族接觸—北の視点から』、一九八九年、六興出版

（おもはら・ノエリ／千葉大学）

参考文献  
AVRORIN V.A.

MATELIAY PO NANAISKOMU LAZYKU I FOL'KLORU, 1986 LENIN-

GRAD

LAUFER B.  
PRELIMINARY NOTES ON EXPLORATIONS AMONG THE AMOOR TRIBES,  
AMERICAN ANTHROPOLOGIST(N.S.), VOL. 2, 1900

LOPATIN I.A.

TALES FROM THE AMUR VALLEY.

THE JOURNAL OF AMERICAN FOLK-LORE, VOL. 46, NO. 181, 1933